

絵本の夜・紙芝居の朝

vol. 10



僕は吃音癖があります。

塾講師という仕事柄、人前で話すことには慣れているのであまり不都合は感じないのですが、実は、人と話をするとときに絶えずある工夫をしなければすぐに次の言葉が出てこなくなってしまうのです。

その「工夫」とは何かというと、それは、次に話す内容を文章の形で思い浮かべて、その文章が目の中の風景と重なって見えるようにしておいて、それを読む、というものです。

その文章は視界の左上あたりに、なぜか国語の教科書を開いた映像と共に、話の内容とは無関係なイラストも付いて浮かんでいきます。

つまり誰かと会話する時、僕は話すのではなく読んでいるのです。

この「特技」は小学5年生の頃、学校生活での必要に迫られて身に着いたものです。

いつも教科書と一緒に思い浮かぶのはそのせいかも知れませんが、ともかく、多少不自然な話し方をしているにもかかわらず、周囲の人たちが暖かく見守ってくれたおかげで、特に吃音癖を気に病むこともなくこれまで過ごしてきました。

絵本『僕は川のように話す』は、ある吃音癖の少年と彼をつつむ光に満ちた世界を描いた美しい作品です。

作者のジョーダン・スコットは吃音癖を持つカナダの詩人で、この作品は彼の実体験に基づいています。

同じくカナダの画家シドニー・スミスの、常に遥か彼方から光が差し込んでくるような絵の世界がとても印象的で、じっと絵を眺めていると、言葉がうまく出てこないもどかしさや疎外感が川の流れのきらめきに昇華していく様子を体感することができるのです。

絵本『僕は川のように話す』

ジョーダン・スコット 文

シドニー・スミス 絵

原田 勝 訳

偕成社 2021 年

さくらももふみ
佐倉桃史®